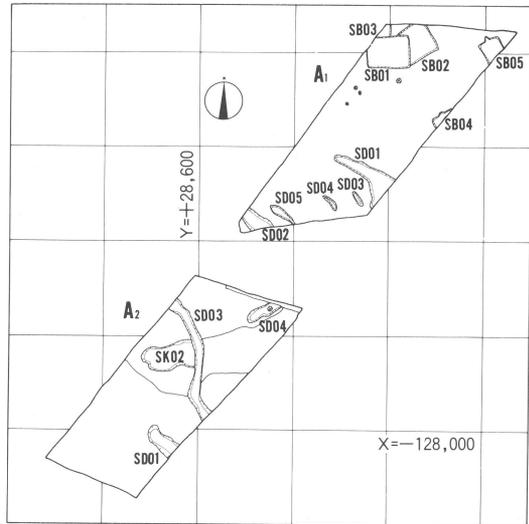


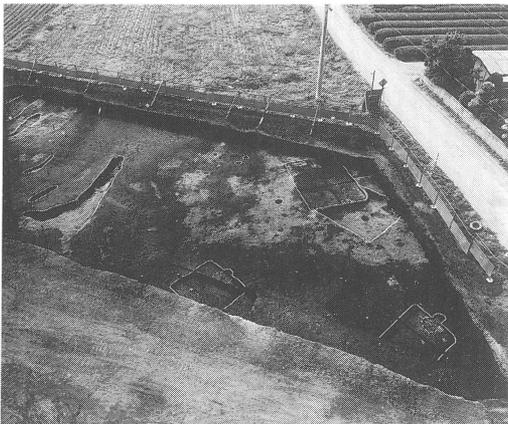
す わ 訪 遺 跡

昨年度に続き、遺跡南部のA区西半の調査を行なう。地形的には、A1区は豊川支流野田川に臨む下位段丘上に、A2区は野田川河谷の緩斜面に位置する。遺構検出は、A1区では黒色土（黒ボク）下の黄褐色土面で、A2区は基盤の砂礫土面で行なう。その結果、奈良時代後半から平安時代初期（8C後半～9C）の竪穴住居5棟、中世（13～14C）の溝1条・土坑1基、時期不明の溝6条、自然河道1条が検出された。SB01の床面上から9世紀代（K-14号窯式併行期）の灰釉陶器、須恵器蓋杯、土師器甕、製塩土器等が一括出土した。東三河地域の、平安時代初期の集落遺跡の土器組成を示す資料と考えられる。

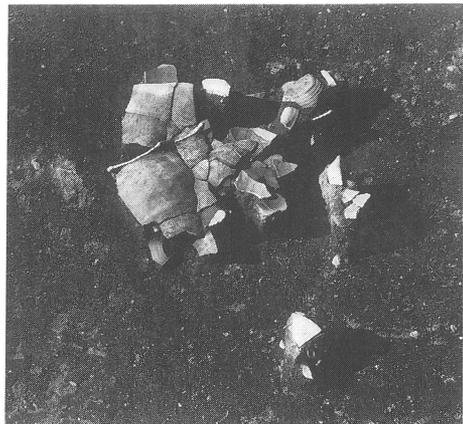
A2区SD03・SK02はほぼ同時期で、少量の山茶椀片が検出された。A2区の基盤より上位の土層は、水田造成によって形成されており、中世初期に開発された耕地に伴う遺構と考えられる。また、自然河道は水田造成より前に流れていた野田川に平行する小河川の痕跡で、基盤面の凹地状の流路に、明黄白色粗砂が0.2～0.5mほど堆積している。埋土中より、弥生土器が少量検出された。（酒井俊彦）



第1図 遺構全体図 (1/800)



第2図 A1区全景 (東より)



第3図 SB01 遺物出土状態